

社会人野球と大学野球の新たな在り方に関する一考察

A study on the new state of a company baseball and student baseball

1K08B197 松本惇史

指導教員 主査 作野誠一 先生 副査 間野義之 先生

【序論】

緒言：現在の企業スポーツを取り巻く環境は厳しい。世界経済の不況によって、日本もこれまでにないほどの混乱に見舞われ、数多くの企業チームが休・廃部に追い込まれている。これは企業スポーツだけの問題に留まらず、大学スポーツや高校スポーツ、ひいては日本のスポーツ界全体に対して影響を及ぼすことになる。日本の野球界は長い間、プロ野球を頂点として、大学野球、高校野球、中学野球、少年野球というピラミッドのような構造をもちながら発展してきた。こうした中で、社会人野球のチームの数のみが減ってしまうと、大学の野球部に所属して競技する学生にとっての選択肢が少なくなり、その結果日本の野球そのものの未来も決して明るいとは言えなくなってしまうのではないだろうか。そこで本研究では、企業スポーツ、そして学生スポーツの新たな在り方を探ることで、アマチュアスポーツが栄えていく為の一つの道筋を示唆することを目的とする。

方法：まず第2章では、東京六大学野球の歴史を振り返っていく中で、大学野球界において昔と比べてどのような変化が起こっているのかということ明らかにする。そして第3章では社会人野球の衰退とその理由について経済的な側面も絡めて考察していく。以上のことを踏まえて、第4章、第5章では大学野球、社会人野球のこれからの在り方についてまとめることとする。

【本論】

第2章：野球というのは華やかな側面を持つ一方で、裏では有望選手の獲得を巡って多額の金銭が動いているケースも見られ、行き過ぎた勝利至上主義が蔓延していると言える。また企業スポーツの衰退に伴って、大学野球界にも何かしらの影響が及んでいるのではないかという予測を持っていたが、現時点においてこの考えは杞憂であると言える。

第3章：当初は「どうすれば企業スポーツは復興することができるのか」という方針も視野に入れていたが、企業スポーツの再興を目指すのは現実的ではないという結論に至った。大きな理由は以下の3つである。

①不況に伴って経費削減が声高に叫ばれる昨今において、企業スポーツは「資金を必要とする割には見返りの少ない存在」となってきた。

②日本独自の経営体制であった「年功序列、終身雇用」が多くの企業で崩れつつあり、かつてであれば社内の一休感や愛社心を醸成するために一定の効果を持っていた企業スポーツのその存在意義が薄れつつある。

③媒体の多様化に伴ってより効果的な宣伝手法が誕生したことによって、企業スポーツの持つ宣伝効果が希薄化してきた。

しかしこれは必ずしも「衰退」ではなく、かつての在り方が今の時代にフィットしなくなったというだけという見方もできる。

【結論】

考察とまとめ：第2章及び第3章の結果を受けて、ここでは他業種も参考にしつつ、トップス広島や新潟アルビレックスBB、モンテディオ山形など、企業とスポーツが新たな関係を構築している例をいくつか紹介した。野球には良くも悪くも旧態依然の側面が見られるが、従来の体制に限界が見られるのは明らかなので、今後は企業との新たな関係作りを模索していく必要があると考える。

今後の課題：企業スポーツの衰退に伴って大学野球界に及んでいる影響に関しては、今後も経年的にデータを取っていかなければ分からない部分も多いと感じる。また本研究では日本国内の独立リーグに関してはほとんど言及していないが、大学卒業後の新たな受け皿という観点ではこれも選択肢の一部に大いになりうるため、これについても取り上げれば深い研究になったと感じる。